

選挙は勝たんと意味がないわねー。「参院のドン」と呼ばれた自民党の青木幹雄元参院議員会長は、選挙のたびにこう口にしていた。勝てば「先生」、負ければ「ただの人」。そんな明暗を見つめ続けてきた政治家の言葉は、重く感じた。

そんなことを思い出したのは、七月一日投票の参院選選挙区（改選数三）が大激戦になったためだ。二議席獲得へ自民と立憲民主党がしのぎを削り、全国屈指の激戦区となった。自民の長谷川岳氏が早々と三選を決めたのは予想通りだったが、二番手以降は日付が変わってもなかなか見通せない状況が続いた。

結果は二位に立憲の徳永エリ氏が入り、三位に自民の船橋利実氏が滑り込んだ。四位の立憲の石川知裕氏は、船橋氏に約二万五千票差で涙をのんだ。得票率の差は1%ほど。何が起きておかしくない状況だった。

報道各社の期日前も含めた道選挙区出口調査を分析すると、一つの「潮目」が浮かぶ。投票前々日の七月八日だ。言うまでもなく、この日の午前、安倍晋三元首相が応援演説中に銃撃され、午後死亡した。

期日前の出口調査では、公示直後の序盤は公明党支持層の動きもあって長谷川氏と船橋氏が優位だった。だが、その後も安定

「潮目」の道選挙区参院選

した伸びを見せた長谷川氏は別として、次に徳永氏と石川氏の勢が増し、銃撃事件の前日には船橋氏を含む三人がほぼ横並びの状況になっていた。

金曜、土曜で立憲側が追い抜くかもしれない。各陣営が支持獲得の追い込みに全力をかける中、事件は起きた。ある社の出口調査では銃撃後の八日午後から石川氏の勢いが落ち、船橋氏は着実に支持を積み上げた。翌日も同様の傾向は続いた。

投票日、あまりに記憶が生々しかったせいか、報道各社は自民の勝因として事件にさほど言及しなかったが、接戦となった道選挙区では得票にそれなりの影響を与えたのは間違いない。事件がなければ、船橋氏と石川氏はさらに競り合っていただろう。政治家には運も必要だというが、石川氏は運に恵まれなかったといえる。

もともと立憲内部では党勢低迷を受け、道選挙区への二人目の擁立には異論があった。それでも石川氏が公募に応募し、一月に公認を得た。「選挙の鬼」と呼ばれる鉢呂吉雄前参院議員の後継指名も受け、選挙戦では二人三脚で草の根の戦いを繰り広げた。その勢いは連合北海道が推薦するもう一人の立憲の候補、徳永氏に脅威を感じさせるまでに拡大。立憲のベテラン秘書は「さ

すがは小沢（一郎衆院議員）の弟子だ」と舌を巻いていた。

銃撃事件がなかったら、国民民主党が候補を立てなかったら、もっと早く立憲が公認を決めていたら……。いまさら「タラレバ」を言っても仕方ないと思うが、さまざまに思いが浮かんでくる。投票日が事件直後ではなく、国会議員と旧統一教会の関係や、安倍氏の国葬決定を巡って与党側への有権者の不信感が高まっている今なら、また結果は違っただろう。

まだ四〇代の石川氏だが、これまでも多くの苦勞を背負ってきた。小沢氏の秘書時代の資金提供事件で公民権が停止され、二週間ほどの差で衆院選に出馬できなかった。さらに二〇一九年には自民が夕張市長として人気の高かった鈴木直道氏（現知事）を立てた知事選に、対抗馬として立たざるを得なかった。

ただ、石川氏の健闘は、野党が経験と力のある候補を立てれば、道内ではまだ戦えるという印象を残し、「意味のある負け」だったとはいえる。政治に緊張感をもたらすためには、野党の踏ん張りが必要だ。野党にはせつかくの人材を無駄にしないためにも、与党とは違う社会像を明確にし、次の戦いに備えることを望む。 八転V